

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320055

研究課題名(和文) ポスト太平洋戦争の「英米文学」研究 トランスパシフィックな文学的想像力と政治学

研究課題名(英文) English and American Literary Studies in the Post-Pacific War Era: Transpacific Literary Imagination and Politics

研究代表者

越智 博美(OCHI, Hiormi)

一橋大学・大学院商学研究科・教授

研究者番号：90251727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代以降の日本が海外との交渉のなかで自己形成してきた事実に着目し、おもに日本と合衆国のあいだのトランスパシフィックな文化の相互交渉が、日本の文化および英米文学研究というアカデミズムに与えた影響の分析である。具体的には英米モダニズムの(特に合衆国を介した)文化・文学の受容、および研究体制が日本の文化や日本の文学研究に与えた影響を、太平洋戦争前後の断絶と継続性を踏まえて考察し、文化や想像力の相互干渉という視点を入れつつ理論化を目指し、またアジア太平洋研究でリードするカリフォルニアの複数大学の研究者・研究所とのあいだで研究の連携体制の構築を目指すものである。

研究成果の概要(英文)：The goal of this project is to explore how the transpacific cultural (and hegemonic) negotiation between the two countries operated in the reformulation of Japanese culture and academic discipline of English studies and American literary studies during World War II and the post-war era. It specifically focuses on (1) analysis of what influence the introduction of modernist culture and literature had on Japanese culture and English and American literary studies in Japan with (dis)continued factors between pre-war and post-war eras; (2) analysis and theorization of how Japanese culture and English and American literary studies have been instrumental in the formation of post-war liberalism, and globalization and neoliberalist regime in the context of mutual negotiation of culture and imagination between the U.S. and Japan; and (3) establishment of a scholarly network with leading Californian institutions and scholars.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：冷戦 英米文学研究 占領期 トランスパシフィック リベラリズム 広島 沖縄 台湾

1. 研究開始当初の背景

本研究は、近年の英語圏モダニズム研究の潮流として、Paul Gilroy の「ブラック・アトランティック」概念をはじめとしてトランスアトランティック、あるいは西半球という視点からの研究が大きな流れを占めている中、こと日本に関していえば、むしろ東半球、アジア太平洋をまたがる交渉、あるいは文学的、文化的な想像力そのものを考えないわけにはいかないという問題意識を出発点としている。

この流れのなかでアメリカ研究それ自体も太平洋を意識せざるを得ず、John Carlos Rowe, *Literary Culture and U.S. Imperialism* (2000) や Amy Kaplan, *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture* (2002) などはアメリカのナショナルな想像力に太平洋を組み込んでいる。本研究の協力者でもある Rob Wilson と Yunte Huang はそれぞれ *Reimagining the American Pacific* (2006) 、 *Transpacific Imaginations* (2006) という、太平洋という視点で分析した先駆的研究書を発表している。他方、1990年代以降、冷戦研究のあらたな展開として Christina Klein, *Cold War Orientalism* (2003) Naoko Shibusawa, *America's Geisha Allay* (2006) といった冷戦オリエンタリズム研究も登場し、現在、太平洋の地政学から文学を考え直す動きが活発となっていた。本研究はこの文脈の中にある。

プロジェクトへの参加者はそれぞれ本研究の分担領域で実績を持つ研究者である。吉原はアジア太平洋文学研究の過程ですでに日本のロビンソン・クルーソー表象研究を明治から戦前まで進めており、『帝国日本の英文学』で日本の英文学と帝国主義の関係を論じた齋藤は、さらに小笠原や広島というトポスで文学を考えることを目指す。

三浦は冷戦期合衆国のリベラリズムと現在のグローバル化の理論的考察が専門だが、村上春樹のグローバル受容を考察した “On Globalization of Literature” (*Electronic Book Review*, 2003) を契機にその射程を日米文化交渉に広げ、Walter Benn Michaels の最新の議論との接続を目指している。井上は、太平洋を表現の根幹に据えた戦後合衆国の詩人 Charles Olson、米国統治下における沖縄の芸術運動研究といった領域で実績があり、韓国、台湾も射程に入れた研究を行い、理論面を担当する。また越智はアメリカ文学において冷戦初期に主流をなした新批評家と冷戦の文化研究、占領期日本におけるアメリカ文学の輸入、あるいは再導入に関する実証的研究も行っており、この分野の専門である。

以上のように全員が(政治や経済とも連動したものとしての)文化のヘゲモニックな日米関係を本研究の問題意識として共有することから、本共同研究によって重層的な議論と

それともなう成果を出すことを念頭において計画された。

2. 研究の目的

本研究は、おもに日本と合衆国をめぐる想像力のコンタクト・ゾーンとして太平洋を捉え、トランスパシフィックな想像力の表出とそのありようを、とくに戦後日本を起点に捉え返し、書き直す。近代以降の日本が海外との交渉のなかで自己形成してきた事実に着目し、おもに日本と合衆国のあいだのトランスパシフィックな文化の相互交渉が、日本の文化および英米文学研究というアカデミズムにどのように影響を与えているかを分析することを目的としている。その際方法論として、戦後の国際関係における日米の政治的布置を踏まえたうえで、歴史資料調査、およびテキスト分析、それらを繋げるかたちで理論構築を行って総合していく。

具体的に目指すところとしては以下の通りである。

(1) 英米モダニズムの(特に合衆国を介した)文化・文学の受容が日本の文化や日本の文学研究に与えた影響を、太平洋戦争前後の断絶と継続性を踏まえて考察する。(2) アメリカとの関係性において、戦後英米文学研究と日本文化が、戦後のリベラリズム、ひいては現在のグローバル化と新自由主義体制にいかなるかたちで関与しているのか、文化や想像力の相互干渉という視点を入れつつ理論化をめざす。(3) アジア太平洋研究で学会をリードするカリフォルニアの複数大学の研究者・研究所とのあいだで研究の連携体制を構築することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、大半はアメリカ発の先行研究がとかくアメリカからの視線に留まりがちな傾向を日本の植民地でもあった韓国や台湾も含めた日本からの視点を含む文学作品分析と交錯させつつトランスパシフィックな(ポスト)モダニズム文学および文学的想像力を批判的に再検討し、今後の研究に向けた理論構築を目指す。具体的には上記の3点の分析のために、戦後の国際関係における日米の政治的布置を踏まえたうえで、歴史資料調査、およびテキスト分析、それらを繋げるかたちで理論構築を行って総合していく。

より具体的には、以下のような研究を行う。

1) トランスパシフィックな想像力の交渉とその軌跡を分析。戦中から戦後、現代にかけての文学表象の継続性やその断絶を政治的・歴史的に、あるいは作品から分析する。

具体的な分析対象として、a) 冷戦オリエンタリズム(川端康成の翻訳、ノーベル賞や日本

人のロビンソン・クルーソー表象、英語日本語の交錯文化圏としての小笠原での英米文学に見られる太平洋からの日本人主体構築。文学研究制度（『英語青年』を中心に）の歴史分析。冷戦期合衆国におけるアメリカ研究のナショナリズムの乗り越えを目指した Charles Olson の著作の分析、米軍統治下の沖縄の文学・文学運動の分析、Cool Japan 文化の分析。以上を通じて、最終的には日米の文化交渉とその構築過程を多様な側面から分析し、文学・文化を日米の政治学のなかで再定位する。

2) トランスパシフィックという分析枠を支える理論構築。とくに冷戦期までの「アメリカン・スタディーズ」が「太平洋」に対して持ってきた政治的無意識と日本の文化が self-colonizing なかたちで戦後に参入していった過程が鏡像関係をなした経緯を批判的に再検討することを通じて、合衆国のヘゲモニックなグローバル化 / 新自由主義化が、いかにトランスパシフィックな日米交渉と文化構築にかかわるか、そのダイナミズムのモデルを理論化する。

3) 南カリフォルニア大学 Center for Transpacific Studies, UC サンタクルーズ Asia-Pacific-Americas Research Center といった合衆国におけるトランスパシフィック文学・文化研究の拠点機関との日米連携のネットワークを構築すると同時に、一橋大学を国内の研究グループ拠点にする。そのために数名の研究者とつねに連絡を取り合いながらさらなるネットワークングを行う。

4. 研究成果

大変残念なことに当初のメンバーであった三浦玲一急逝(2013年)により、ひとりメンバーを欠くなかでこの研究は行われた。そのような中でも、故人の遺志を引き継ぎつつ、最大の努力で研究に臨むことができたと思う。全体として、それぞれの課題たほかに、ネットワーク作りについては、Viet Thanh Nguen, Harilaos Stecopoulos, Yunte Huang, Yu-Fang Cho, Madeline Tien, Takashi Fujitani らの招聘を果たし、トランスパシフィックという視点の有効性を再確認したほかに、今後に関わるプロジェクトの構想も開始している。個別の具体的な成果としては、以下の通りである。

越智は、当初予定通り、冷戦期における文学の受容、変容について調査、考察をおこなった。まず川端康成の「雪国」の翻訳がいかなるかたちで冷戦期のオリエンタリズムの文脈において提示され、またそのノーベル賞受賞にいかなる意味があるのかについて、アーカイヴの調査結果も踏まえながら、あらたに翻訳者のエドワード・サイデステッカーに光を当てながら、いかに冷戦期の批評を用いつつサイデステッカーが川端を評価し、ま

た冷戦期にふさわしい文学として川端を翻訳して紹介したかを明らかにした。

同様に、アメリカのノーベル賞作家であるフォークナーが、冷戦期の言説といかに交渉しながら深いヴィジョンを持っていたかということ、『寓話』の精読から光を当てたほか、戦時中の、一見してプロパガンダ小説と見える短編が、愛国言説と寄り添いつつ、そこに批評的なまなざしを秘めているかについても、学会発表およびその文章化をおこなった。

また、アメリカの新批評が占領期のあとの日本におけるアメリカ文学の読解に占めた位置づけについて、その論理も踏まえながらまとめたほか、占領期以降のアメリカ文学研究について、それがいかに軍事的な日米同盟の枠組みのなかで構想された「文化政策」の一部を為していたかについて、政府文書の調査結果も用いつつ、明らかにした論文を発表した。

井上は米国の批評誌 *Criticism* に韓国系アメリカ人作家・映像アーティストであるテレサ・ハッキョン・チャ論を掲載した。チャの文学テキストと映画理論の双方を当時のアメリカ西海岸でのアートシーンと韓国の政治運動状況に基いて丹念に精読しながら、ジャック・デリダの憑在論にも依拠することで、従来のアジア系アメリカ文学研究によるトラウマの記憶と人種化されたアイデンティティとを安易に結びつける視座とは大幅に異なる共同性のあり方をチャの作品に見出した。

また米国統治期から現在に至る沖縄での詩的表現と視覚アートとの達成点を理論的に探求する一連の論考を発表した。清田政信論（詩）根間智子論（現代美術）仲宗根香織論（写真）がそれらにあたる。

さらに日本アメリカ学会の年次大会に招聘を受けた口頭発表では「日米友好」パラダイムを看過する日本国内における「アメリカ研究」のあり方を批判し、別様の友愛の可能性を見出す口頭発表を行った。また本科研費で開催した国際シンポジウムではベトナム戦争期のアメリカ文学・映像・美術作品（モニク・トゥルン、ロバート・スミッソンなど）における色をめぐる思考の深化とに関する論考を発表し、招聘講師であるタカシ・フジタニ氏マデリン・ティエン氏らと議論を行った。

吉原は、アジアにおける「英米文学」研究・教育制度の地政学的意義をとくに、日本の植民地であった地域（朝鮮半島・台湾）に出自を持つかあるいはそこで活動を行った人物の1945年以降の業績に重きをおいて（George H. Kerr, Younghill Kang, 崔載瑞）探求した。

また正典的英米文学作品とポピュラー・カルチャーの関係を探るため、コミックスを含めた若者文化が冷戦期に問題視されたことや、クール・ジャパン・ムーヴメントにおける主

力文化資本としての漫画の機能を念頭におきつつ、グローバル・メディアとしての manga/comics/anime におけるシェイクスピア作品を研究した。

さらに、英米文学作品のアジアにおけるアダプテーションに注目し、L. M. Montgomery, *Anne of Green Gables* および Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* の派生作品を研究、そこに英米の政治的・文化的覇権に対する、アジアの複雑な応答を見出した。

齋藤は、太平洋戦争終結後の時期の日本とアメリカとの関係を念頭において、(1)日本の英米文学研究者が英米文学・文化、特にアメリカ文学をどのように受け入れた(あるいは拒絶した)のか、そして(2)英米の文学者がどのように日本の敗戦(とその後)をどのように理解しようとしたのか、調査研究を行った。その際、日米(英)の価値観が非常に対照的になる、米軍による広島市と長崎市への原子爆弾投下に対する日米(英)の研究者・文学者の応答の仕方に着目した。この調査は、ジョン・ダワー『敗戦を抱きしめて』(1999年)の問題設定をさらに推し進めるものであった。

具体的には、広島県福山市出身の英文学者、福原麟太郎の『著作集』『随筆集』を読み解くことから明らかにした。他方、広島市内で二次被曝した英文学者、大原三八雄が、峠三吉などの原爆詩人の作品を、ラファエロ前派の詩人、特にクリスティナ・ロセッティを参照しながら、英語に訳して出版し続けたことに着目し、「福原麟太郎・広島・原爆爆弾——研究経過報告」という文章の中で研究の進捗状況を公開した。

また、イギリスの詩人・編集者—冷戦期の反共主義の一翼を担ったリベラル派の雑誌 *Encounter* の編集に携わった—スティーヴン・スペンダーが、1957年に広島市を訪れ、平和記念公園を訪問した後に広島大学で“Problems of Modernism”という講演をおこない、保守派のモダニスト詩人 T. S. Eliot の *The Waste Land* (1922年)を引用しつつ、その第3部“The Fire Sermon”に広島への原爆投下を重ねていったことに着目して分析し、その成果を *Modernist Studies Association* (MSA 16, 2014年)にて、“Problems of Modernism in Hiroshima, 1957”という題で口頭発表をおこなった。

さらに、ジョン・ハーシー『ヒロシマ』(1946年)の原書(Knopf版)をGHQが1951年に日本国内の主要大学における英語教科書として使えるように輸入しようとしたという事実を明らかにした上で、導入に反対したのが福原麟太郎、賛成したのが野崎孝(サリンジャーの翻訳で有名)であったことを明らかにしつつ “Not to Read Hiroshima: Rintaro

Fukuhara, Takashi Nozaki and John Hersey's Hiroshima”という口頭発表を本科研究費による国際会議、*Transpacific Literatures / Literary Studies in (Post) Imperial Japan* (筑波大学東京キャンパス、2014年3月)にておこなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計12件)

越智博美「奇妙な果実」『物語研究』第16号(2016) 掲載決定。査読なし

越智博美「文化の占領とアメリカ文学研究」*The American Review* 50: 21-43 頁2016年 査読なし

越智博美「絶望しつつ希望する——冷戦小説としての『寓話』、『フォークナー』第17号、日本ウィリアム・フォークナー協会: 73-89頁、2015年 査読なし

越智博美「アメリカ文学のモダニスト的転回——南部詩人にとってのエリオット」『*T.S. Eliot Review*』25号: 1-20頁、2014年 査読なし

井上間従文「承認の外へ 根間智子と仲宗根香織の写真における「問い」としての沖縄」、越智博美、河野真太郎(編)『ジェンダーにおける「承認」と「再分配」 格差、文化、イスラーム』(図書収録論文) 201-224頁、2015年 査読なし

井上間従文 時間の押し花を拡散させること - 仲宗根香織の写真における「過去/未来」のイメージ - イメージ論に向けて(1) 『*las barcas*』 別冊巻 32-41 頁 2014年 査読なし

井上間従文 根間智子、暗い部屋からつながる特異なかたち - イメージ論に向けて(2) 『*las barcas*』 別冊巻 83-91 頁、2014年 査読なし

Mayumo Inoue "Theresa Hak Kyung Cha's *Phantomnation*: Cinematic Specters and Spectral Collectivity in *Dictée* and *Apparatus*" *Criticism: A Quarterly for Literature and the Arts*, 56 巻 1 号: 63-87 頁、2014年 査読あり

井上間従文 「帝国の「ほつれた縁」、または、生政治の「孤島」たち—マシーセンとオルソンの『白鯨』論」、竹内勝徳、高橋勤(編)『環大西洋の想像力—越境するアメリカン・ルネサンス文学』(図書収録論文) 321-345頁、2013年 査読なし

Yukari Yoshihara "Tacky Shakespeare in Japan" in *Multicultural Shakespeare*, Vol.10,

no.25, July 2013, University of Lodz. pp.83-97.
DOI: 10.2478/mstap-2013-0007 査読あり

井上間従文 「石たちの「共感域」—1960年代の清田政信における「オブジェ」たちの共同性」、『Las Barcas』2巻39-51頁、2012年 査読なし

井上間従文 「物語の「根源」—諏訪敦彦の『2/Duo』と『H Story』』、『ECCE 映像と批評』3巻、90-103頁、2012年 査読なし

〔学会発表〕(計22件)

Hiromi Ochi “Re-introduction of American Literature in Post World War II Japan.” (International Symposium: Discourses and Aesthetics of Transpacific America/Asia) 2016年02月15日、一橋大学、東京都国立市

Mayumo Inoue “The Colors of Thinking after the Vietnam War” (International Symposium: Discourses and Aesthetics of Transpacific America/Asia) 2016年02月15日、一橋大学、東京都国立市

Hiromi Ochi “Ambivalent Negotiation with Modernism and the Recreation of Post World War II Japan.” (MSA 17 Boston) 2015年11月22日、Westin Copley Place, Boston, USA

Mayumo Inoue “Olson's ‘Ruin’: A Genealogy of Race and Origin of Objects in the Pacific” (MSA 17 Boston) 2015年11月22日、Westin Copley Place, Boston, USA

Mayumo Inoue “Toward an ‘Invisible Commune’: Poetic and Painterly Tracings of the Sensible in Postwar Okinawa.” (2015 Asia Theories International Symposium) 2015年10月2日、National Chung Hsing University, Taichung, Taiwan

越智博美 「動員をめぐる言説——第二次世界大戦と文学者」アメリカ学会第49回年次大会 部会B「愛国の語り方、反戦の唱え方——アメリカの戦争をめぐる文学者・知識人の言説」2015年6月7日、国際基督教大学、東京都三鷹市

齋藤一 「原子爆弾について語ることの困難さについて—福原麟太郎と佐多稲子を中心に」、 「2015年若手研究者の合同研究フォーラム」、2015年05月23日、台湾国立政治大学日本語文学系、台北市、台湾

Hiromi Ochi “Embracing Modernism As Reconstructing Post-World II Japan.” (MSA16

Pittsburgh) 2014年11月7日、Omni William Penn Hotel, Pittsburgh, USA

Hajime Saito “Problems of Modernism in Hiroshima, 1957” MSA 16 (Modernist Studies Association)、2014年11月07日、Pittsburgh, USA

越智博美 「フュージティブ詩人、南部を出る——「モダニズム」の承認に向けて」日本英文学会関東支部2014年度秋季大会シンポジウム「モダニズム文学と知識人サークル」2014年10月26日、上智大学、東京都千代田区

越智博美 「冷戦とフォークナー——絶望しつつ希望する」日本Faulkner協会第17回全国大会シンポジウム「フォークナーと戦争」2014年10月3日、藤女子大学、北海道札幌市

Yukari Yoshihara “Strange Adventures of a man who called himself A Japanese Robinson Crusoe: Oyabe Jenichiro (1868-1941)” (Robinson Crusoe in Asia) 2014年09月19日、茨城県つくば市、筑波大学

Yukari Yoshihara “Looking for Anne and Memories of the Second World War” (L.M.Montgomery and War, L.M.Montgomery Institute) 2014年06月28日、University of Prince Edward Island, Charlottetown, Canada

Mayumo Inoue “Critique of Friendship: On Global Sovereignty, its Nation-Forms, and People without a Country” (The Japanese Association for American Studies, the 48th Annual Meeting) 2014年06月8日、Ginowan, Okinawa

越智博美 「アメリカ文学のモダニスト的転回——南部詩人にとってのエリオット」日本T.S.E.エリオット協会第26回大会特別講演 2013年11月10日、大阪学院大学、大阪府吹田市

Mayumo Inoue “Interrupting the Postcolonial/Neoliberal Governmentality: the Events of Light in Secret Sunshine” (Inter-Asia Cultural Studies 2013) 2013年07月3日、National University of Singapore, Singapore

Hiromi Ochi “The Modernist Turn in English Studies in Post-World War II Japan.” (The 2nd Convention of Chinese/American Association for Poetry and Politics) 2013年6月8日、華中師範大学、武漢市、中国

Mayumo Inoue “On Bare ‘Objects’: Kiyota Masanosbu’s Poetics of “Stones” in the US-Occupied Okinawa” (Except Asia: Agamben's Work in Transcultural Perspective)

2013年06月25日, National Taiwan Normal University, Taipei, Taiwan

Mayumo Inoue "Theresa Hak Kyung Cha's Hauntology" ("Supernatural Asia—Exploring the Natural and Supernatural in Asian Cinema") 2013年04月27日, Josai International University, 東京都千代田区

Yukari Yoshihara "Younghill Kang: the First Korean American Writer and His Transpacific Crossing" 「ポスト太平洋戦争の「英米文学」研究」——トランスパシフィックな「英米文学研究」の想像力と政治学」筑波大学東京キャンパス、2013年03月18日、東京都文京区

① Hajime Saito "Not to Read *Hiroshima*: Rintaro Fukuhara, Takashi Nozaki and John Hersey's *Hiroshima*" 「ポスト太平洋戦争の「英米文学」研究」——トランスパシフィックな「英米文学研究」の想像力と政治学」筑波大学東京キャンパス、2013年03月18日、東京都文京区

② 吉原ゆかり 「京城帝国大学（当時）・台北帝国大学（当時）における西洋文学研究・教育についての現地基礎調査報告」、「帝国日本の文学研究・教育」筑波大学、2013年02月17日、茨城県つくば市

〔図書〕(計7件)

Yukari Yoshihara, Alexa Huang and Elizabeth Rivlin 他(共著), *Shakespeare and the Ethics of Appropriation*. Palgrave, 2014. 274 (140-151).

越智博美、村上東、大田信良 他(共著) 『冷戦とアメリカ——覇権国家の文化装置』臨川書店、2014年、403 (251-284)

越智博美、吉原ゆかり、齋藤一、遠藤不比人 他(共著) 『日本表象の地政学—海洋・原爆・冷戦・ポップカルチャー』彩流社、2014年、239(137-160、23-45、79-108)

吉原ゆかり、大城房美 他(共著) 『女性とマンガ——ポスト・グローバル時代の可能性』勁草書房、2014年、307(48-61)

越智博美、三浦玲一、河野真太郎 他(共著) 『文学研究のマニフェスト——ポスト理論・歴史主義の英米文学批評入門』研究社、2012年、204(91-120)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

越智博美 (OCHI, Hiromi)
一橋大学・大学院商学研究科・教授
研究者番号：90251727

(2) 研究分担者

井上 間従文 (INOUE, Mayumo)
一橋大学・大学院言語社会研究科・准教授
研究者番号：50511630

吉原 ゆかり (YOSHIHARA, Yukari)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：70249621

齋藤 一 (SAITO, Hajime)
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：20302341

三浦 玲一 (MIURA, Reiichi)
一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：70262920